

南東アラビア山麓峡谷における人間活動を探る —オマーン、タヌーフ地区における考古学調査(2022～2023年)—

黒沼 太一 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所助教
三木 健裕 東京大学総合研究博物館特任助教
板橋 悠 筑波大学人文社会系准教授
田邊幹太郎 東京大学大学院人文社会系研究科博士課程
近藤 康久 総合地球環境学研究所経営推進部准教授

Exploring Human Activities in a Canyon of Southeastern Arabia: Archaeological Investigations in the Tanūf District, Oman in 2022–2023

KURONUMA, Taichi Assistant Professor, Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa, Tokyo University of Foreign Studies

MIKI, Takehiro Project Research Associate, The University Museum, The University of Tokyo

ITAHASHI, Yu Associate Professor, Institute of Humanities and Social Sciences, University of Tsukuba

TANABE, Kantaro Doctoral Course, Graduate School of Humanities and Sociology, The University of Tokyo

KONDO, Yasuhisa Associate Professor, Strategic Planning and Management Department, Research Institute for Humanity and Nature

1. はじめに

今日のオマーン及びアラブ首長国連邦の国土に相当する南東アラビアの大部分は砂漠気候に由来する乾燥地帯であるが、北縁を東西に走るハジャール山脈周辺では、インド洋モンスーンの影響で豊かな水資源がもたらされている。この地理的条件の中で千年スケールで人と自然の関わりを捉えるため、発表者たちの調査隊は、ハジャール山脈南麓のタヌーフ地区(図1)にて2017

年より考古学調査を継続し、2022年の本報告会で成果を報告した(三木ほか2022)。その後、2022～2023年調査で新たな進展があったため、今回その成果を報告する。

2. タヌーフ地区におけるこれまでの発見と2022～2023年調査の目的

タヌーフ地区はハジャール山脈有数の峡谷を擁し、ボトルウォーターの産地として知られている。この自然環境は先史時代以来人類の生活に適していたと考えられるが、考古学調査は散発的であり1970年代に前期青銅器時代ハフィート期(前3300～2700年頃)のケルン墓が4基、同ウンム・アン＝ナール期(前2700～2000年頃)の円形基壇が2基踏査されたほか、峡谷内部で岩絵地点が2ヶ所知られるに留まっていた。

発表者たちの調査隊は、先史時代の山越え移動を想定して旧石器時代の堆積を有する洞穴遺跡を探索するためにタヌーフ峡谷で調査を開始した。その後、ムガーラトゥ・ル＝キャフ洞穴遺跡(WTN01遺跡)の発見により、研究目的をより広範に広げ、移動と景観を手がかりに峡谷における千年単位での人類活動の変容を明らかにするため、広域踏査と発掘を組み合わせた調査へと移行した。その結果、2020年初頭までに前期青銅器時代からイスラム期に至る洞穴・墓地・遺物散布地など峡谷内を中心に12ヶ所の遺跡を見つけた(Kuronuma et al. 2022)。ムガーラトゥ・ル＝キャ

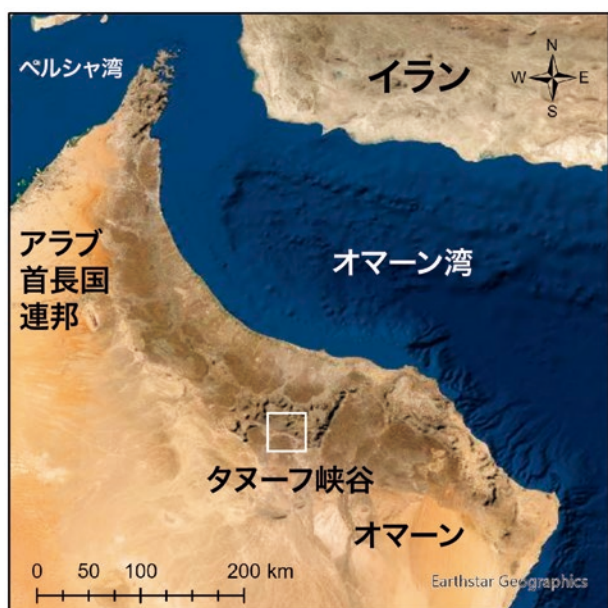


図1 タヌーフ地区の位置

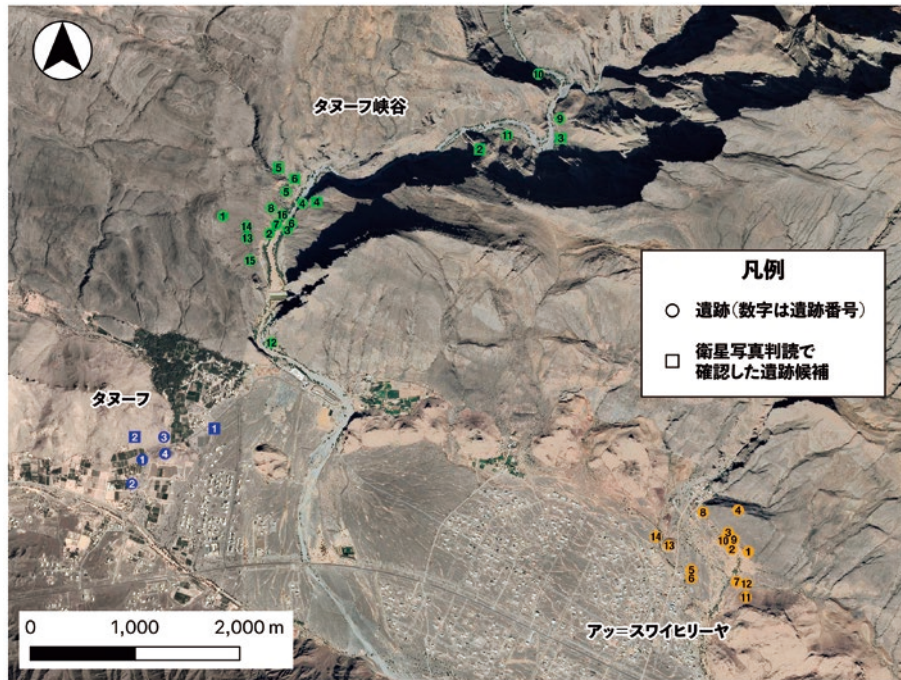


図2 2022～2023年調査終了時のタヌーフ地区における遺跡の分布

フ洞穴遺跡では、発掘調査により中期青銅器時代ワーディー・スーク期(前2000～1600年頃)を主体に断続的な洞穴利用を確認した。また峡谷内外の景観比較のため、峡谷開口部から南西1.5kmのタヌーフおよび南東4.5kmに位置するアッ=スワイヒリーヤを踏査し、タヌーフでは前期青銅器時代の墓地および円形基壇遺跡を4ヶ所、アッ=スワイヒリーヤでは新石器時代からイスラーム期に至る墓地・城砦・遺物散布地・マウンドを8ヶ所記録した(図2)。

2022～2023年調査は、考古学的景観の復元に向けた情報を拡充するための広域踏査に加え、ムガーラトゥ・ル=キャフ洞穴遺跡における土層堆積状況と関連する人類活動のより詳細な把握、および古代DNA・プロテオミクス分析・ ^{14}C 年代測定用試料を採取するための発掘調査を目的とした。

3. 広域踏査

タヌーフ峡谷では、7遺跡(WTN02・WTN05・WTN07・WTN08・WTN13・WTN14・WTN16)で遺構の記録と遺物の表面採集を行った。

低位段丘上のWTN02遺跡では、イスラーム期の墓4基および恐らく前期鉄器時代の削平された建築物の一部・土器散布地を確認した。北側に隣接する未削平のWTN07遺跡では、建築物やプラットフォーム、テラス縁辺を囲う石壁、123基のイスラーム期墓に加え、オマーンでは珍しいワーディー・スーク期と推定

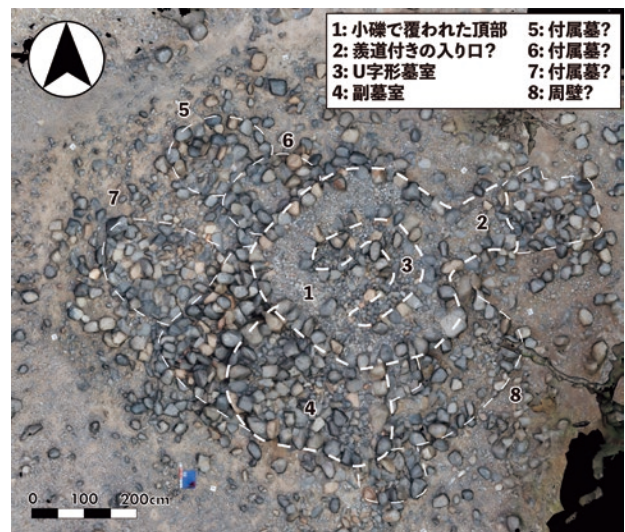


図3 WTN07遺跡第122号墓

される集葬墓(第122号墓)を発見した(図3)。第122号墓は円形の主体部にU字形の墓室を有し、北東部分に羨道と見られる箇所があり、南西～南東部分に副墓室が張り付き、さらに北西部分には恐らく付属墓が複数ある一方、南東部分には石列を有するなど、既知の集葬墓の特徴を寄せ集めたかのような構造を推定できた。この墓は紀元前2千年紀前半の墓制とその背景の考察に非常に重要であり、発掘調査を計画している。

崖錐部テラス状緩斜面では、WTN08遺跡にてハフィート期ケルン墓やワーディー・スーク期の一次葬墓・前期鉄器時代(前1300～300年頃)墓を複数確認し



図4 WTN14 遺跡における岩陰転用墓の一例



図5 WTN05 遺跡イスラム期城砦

た。WTN13 遺跡での追加踏査では、恐らく前期鉄器時代の岩陰転用墓を6基、ワーディー・スーク期の一次葬墓を1基確認した。また北側に隣接する WTN14 遺跡では、ワーディー・スーク期の一次葬墓を19基および前期鉄器時代の岩陰転用墓を8基確認した(図4)。

峡谷西岸台地部分では、イスラム期城砦 WTN05 遺跡を発見した(図5)。複数の建築物址に加え、正面部分に巨大な防壁、台地縁辺部分に複数の壁体があり、地形を活かした防御が推定される。また遺存状態が悪い前期青銅器時代墓なども確認でき、城砦への石材転用が推定できる。

アッ=スワイヒリーヤでは、沖積地上で新石器時代と見られる遺物散布地(SWH09 遺跡)や時期不詳壁体群(SWH10 遺跡)、ワーディー・スーク期以降の地下式墓5基からなる墓地(SWH12 遺跡)、前期青銅器時代ケルン墓2基およびワーディー・スーク期以降の地下式墓1基からなる墓地(SWH14 遺跡)を確認した。丘陵上に位置する SWH11 遺跡ではハフィート期ケルン墓5基と恐らく先史時代後期墓1基を確認したほか、見晴らしの良い残丘上にて鉄器時代以降の城砦

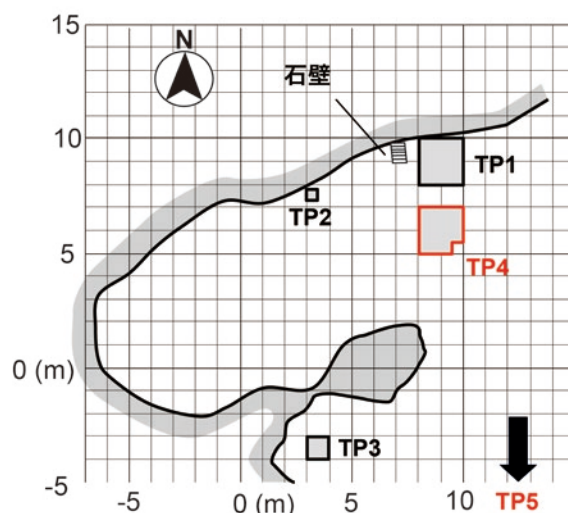


図6 ムガーラトゥ・ル=キャフ洞穴遺跡における発掘区の位置

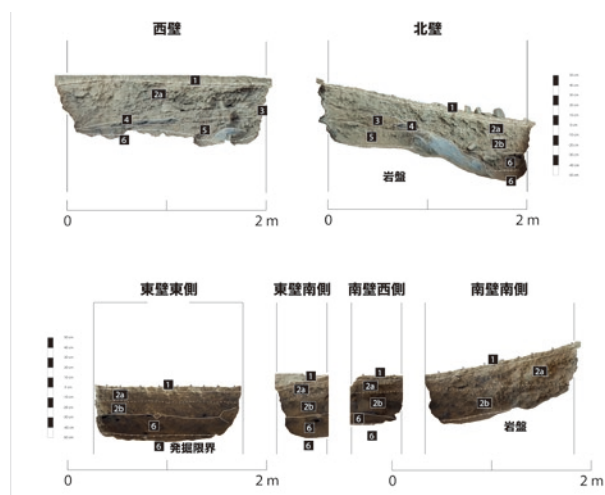


図7 ムガーラトゥ・ル=キャフ洞穴遺跡 TP4 セクション図

(SWH13 遺跡)を発見した。

4. ムガーラトゥ・ル=キャフ洞穴遺跡 TP4・TP5 の発掘調査

ムガーラトゥ・ル=キャフ洞穴遺跡ではこれまで3ヶ所の調査区(TP)を発掘し、洞穴開口部に設けた TP1 で前3千年紀から近代に至る断続的な活動を捉えてきた(Miki et al. 2020; 2022)。特にワーディー・スーク期洞穴利用の発見は南東アラビアで初であり、山岳地帯における活動を示す重要な事例である。

2022~2023年調査では、TP1 から2mの場所に設けた2m四方の調査区 TP4 を発掘した(図6)。その結果、TP4 では第1~6層を確認できた。表土の第1層とその直下の第2a層は TP4 全域に広がる一方で、より下位に位置する第3~5層は TP4 西側のみで、第2b層と第6層は東側でのみ確認できた(図7)。192点

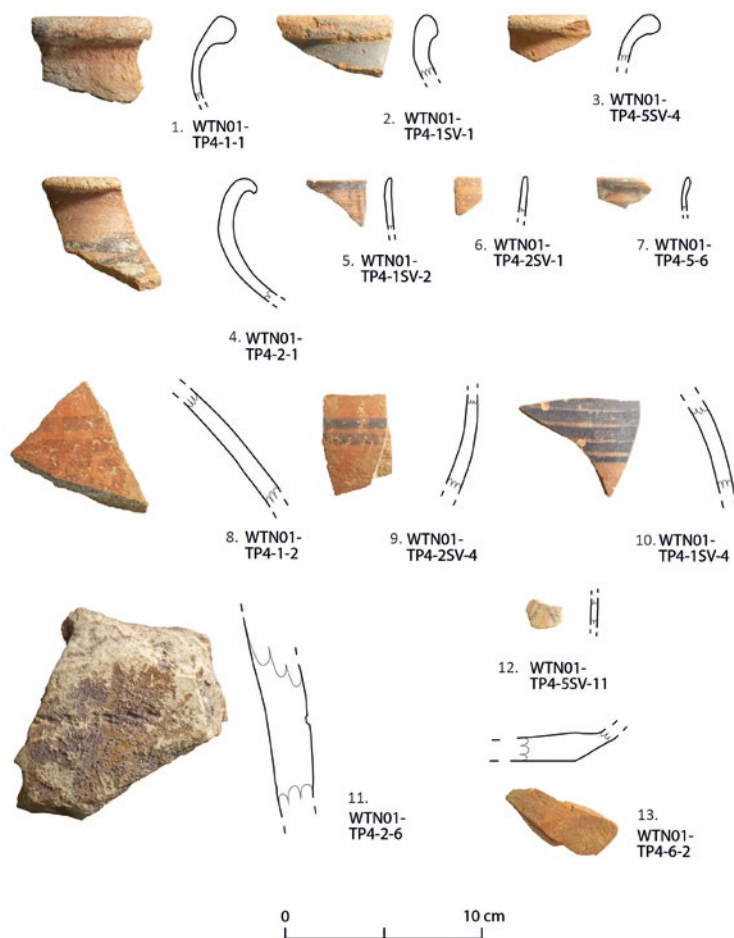


図8 ムガーラトゥ・ル＝キャフ洞穴遺跡 TP4 出土土器

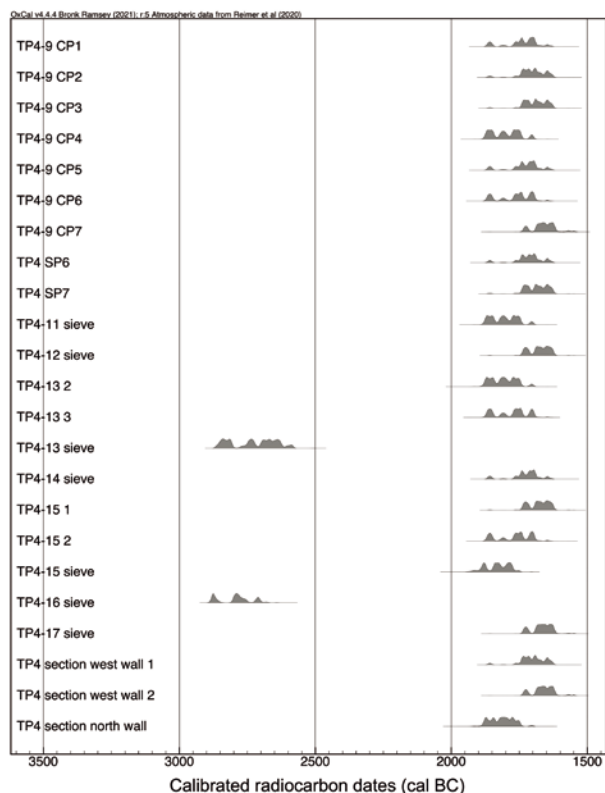


図9 ムガーラトゥ・ル＝キャフ洞穴遺跡 TP4 出土炭化物の放射性炭素較正年代

(4551.7 g)のワーディー・スーク期土器が発見され(図8)、特に第1・2a・2b層において全体点数の55.7%を回収できた。第3・4・6層でも土器を回収できたがその数は少なく、第5層では11点に留まった。この他に石製容器片2点・ナツメヤシ種子を含む炭化物・動物骨・ヤギ糞石などが出土した。石製容器の1点はワーディー・スーク期の被熱した壺小片である。また出土した第2b・4～6層で採取した炭化物や動物骨コラーゲンを試料とした ^{14}C 年代分析の結果、27点の年代値を得ることができた(図9)。前3千年紀前半の値を示した2点を除き、全てワーディー・スーク期の年代値を示し、採取層位の時期差に関しては認識できなかった。この結果は各層位から出土した人工遺物の年代観と整合的である。既測定 of 24点と合算すると計51点となり、南東アラビア随一の絶対年代群となった。

さらに、TP4発掘中に洞穴が開口するテラス下部の岩陰で地表に露出している土器を調査隊メンバーが偶然発見したため、TP5として発掘調査した。この土器は口縁部・頸部・注口部の大部分を欠く以外は完



図10 ムガーラトゥ・ル=キャフ洞穴遺跡 TP5 出土土器

形のワーディー・スーク期の注口土器と見られ、装飾や器面調整などが良好に確認できた(図10)。内部に土壌が充填した状態で見つかったため、今後の自然科学分析により内容物の特定が可能になると期待される。

5. 終わりに

2022～2023年調査では、踏査・発掘調査ともに峡谷における千年単位での人類活動を追跡し得る多くの重要な発見があった。ワーディー・スーク期集葬墓である WTN07 遺跡第122号墓の発見は、定住度の高い平地オアシス集落と関連しない事例(cf. 黒沼2023)として注目できる。また洞穴遺跡ではこれまでの認識を再確認できただけでなく、新たに得られたワーディー・スーク期に属する多数の¹⁴C年代群から、洞穴利用がワーディー・スーク期に特に盛んだったことを裏付けることができた。今後、WTN07 遺跡第122

号墓の発掘による洞穴利用との関連性の解明、踏査の継続、現在実行中の古代DNA・プロテオミクス分析の成果を複合し、峡谷における人類活動の長期的変容に関する理解をさらに高めていくことを計画している。

この調査は、JSPS 科研費 JP20J01674、21H00605 を受けて実施された成果の一部である。調査の実施にあたっては、オマーン国遺産観光省から許可と支援を頂いた。採取した試料の放射性炭素年代は東京大学総合研究博物館に測定して頂いた。また、薦谷匠氏、太田博樹氏、近藤洋平氏らにご協力を頂いた。ご協力いただいた皆様に、末筆ながら御礼を申し上げる。

参考文献

- ・Kuronuma, T., T. Miki and Y. Kondo 2022 Archaeological Surveys of a Canyon and Floodplain in the Tanūf District, North-Central Oman: Optimised Methodology and Applications. *Arabian Archaeology and Epigraphy* 34(S1): S85-S105.
- ・Miki, T., T. Kuronuma, H. Kitagawa, and Y. Kondo 2022 Cave Occupations in Southeastern Arabia in the Second Millennium BCE: Excavation at Mugharat al-Kahf, North-Central Oman. *Arabian Archaeology and Epigraphy* 33(1): 85-107.
- ・Miki, T., T. Kuronuma, H. Kitagawa, A. Noguchi and Y. Kondo 2020 Bronze Age Vessel Remains from the Cave of Mugharat Al Kahf in the Wādī Tanūf: A Preliminary Report of The 2017/18 and 2018/19 Seasons. *The Journal of Oman Studies* 21: 128-143.
- ・黒沼太一 2023「南東アラビア、紀元前2千年紀前半のワーディー・スーク期における墓制の地域性—墓の形態と立地からの検討—」『西アジア考古学』第24号 27-45頁 日本西アジア考古学会。
- ・三木健裕・黒沼太一・北川浩之・近藤康久 2022「南東アラビア山麓峡谷における人間活動を探る—オマーン、ムガーラ・アル=キャフ洞穴の発掘調査(2017～2020年)—」『第29回西アジア発掘調査報告会報告集』65-69頁 日本西アジア考古学会。